第34回生物医学図書館員研究会に参加して

濱元ゆかり*

沖縄協同病院図書室

I. はじめに

2007年2月24日(土)沖縄県青年会館にて「第34回生物医学図書館員研究会」(以下、生図研)が開催された。今回の報告を依頼され、不安はあるものの病院図書室としての目線から簡単に感想を含めた報告をしたいと思う。

生図研は、例年東京での開催が中心と聞いているが、今回は新しい試みで沖縄県内の医学系図書館との交流を兼ねて沖縄県での開催となった。参加者は41名で、沖縄県内からは20名の参加があり、小さな会場が埋まっている状況は、地元参加の私にとっては驚きと喜びでいっぱいであった。

II. テーマおよびプログラムについて

テーマは「小規模図書館のサービス向上と図書館ネットワーク」で、これまで難しかった大学図書館と小規模図書館の交流を大きな目的とし、これをきっかけに相互理解し合い、サービスの向上に繋がればと願うものであった。

プログラムは、以下のようになる。

1. 『生物医学系図書館の協力活動』
(北川 正路：東京慈恵会医科大学学術情報センター)
2. 『PubMed & オンラインジャーナル ステップアップ』
(山岸 里子：埼玉県済生会栗橋病院)
3. 『「沖縄メディカルライブラリー研究会」の紹介』
(濱元ゆかり：沖縄協同病院)

次に講演内容を説明したい。

III. 生物医学系図書館の協力活動：NPO 法人日本医学図書館協会での経験から

日本医学図書館協会の歴史、果たしてきた役割、時代と共に変化する要求や課題などを踏まえた上で、生物医

学系図書館の協力活動のあり方、取り組み方を提起して頂いた。

日本医学図書館協会の長い歴史(1927年から始まる)の中で、当時行っていた活動内容や問題点が、現在とさほど変わらないということが非常に驚きであった。

例えば

- ・共同雑誌目録の作成
- ・外国雑誌の共同購入
- ・ドイツ雑誌値下げ交渉

等である。

また、逆に時代の流れと共に変化してきた活動もある。会員だけに限定されていた研修会への参加が、非会員の参加も認められるようになったことなどである。限られていた活動範囲が、幅の広い活動となってきているのだ。

では生物医学系図書館に求められている協力活動とは何か？

それぞれの図書館の特色を活かしつつ、大学医学図書館と病院図書室の共通したテーマについて協力活動を行うことではないか。

そのヒントとなる具体的例として

- ・電子ジャーナル・コンソーシアム
- ・患者図書館サービス
- ・研修会の開催
- ・レファレンスの協力

*Yukari HAMAMOTO：〒901-0293 沖縄県豊見城市真玉橋593-1.
(2007年5月30日 受理)

- ・著作権問題
 - ・情報流通体制の構築
- 等である。

それらは、いずれも大学医学図書館と病院図書室共通の課題であるので、協力していけるのではないかということであった。

難しい問題もあるかもしれないが、「大学医学図書館」「病院図書室」といったような垣根が取れ、もっと密に交流を深め、共通の認識の下で協力活動ができれば、どれだけ発展していくだろうと病院図書室に勤める私にとっては非常に期待の膨らむ内容であった。

IV. PubMed & オンラインジャーナル ステップアップ

山岸さんは病院図書室に一人体制で勤務されており、その忙しい業務経験から身につけた内容で、司書にとって仕事に直結し役立つうれしい講義だった。

まず病院図書室は、大学図書館と違いすべての業務を一人で行う上、時間も予算も限られている。「限られた労力、時間、お金その中で最大の効果を狙う」というもので、その見出しに惹きつけられ、思わず身を乗り出してしまった。

PubMedのステップアップとして

①研修会や司書同士での情報交換で技術を得る

- ・書誌確認の方法
- ・利用者への講習の方法
- ・その他機能の確認・持ち寄り

②所蔵資料の有効活用

- ・図書室独自のジャーナルリンク集の作成
- ・LinkOutの張り方
- ・MyNCBIの設定：PubMedをカスタマイズする
- ・所蔵アイコンの表示
- ・ホームページの開設
- ・インターネットからの文献オーダーや所蔵検索

など、多くの技術とヒントを講義していただいた。

さらに、MyNCBIの機能を利用したネットワーク所蔵目録作成という提案もあった。参加図書室が共通のID,PWを持ち、その管理をきちんとすれば、これまで作成していた冊子体合同目録より、更新が楽ではないかということである。非常におもしろい考えだと思った。

ひとり部署「でも」、「だから」こそ、

- ・他図書室との連携を大切にする
 - ・情報交換を積極的に行う
 - ・小さな工夫でも予想外の効果が出る
- 図書予算は少なくとも

- ・工夫次第で使いやすくなる
- ・利用者への周知はきちんとする（反応が返ってくるのでやる気につながる）
- ・苦手意識をなくし挑戦してみる

前向きで実際に実践しているところに、強い説得力が感じられた。忙しさを言い訳にせず、逆にバネにしている山岸さんがとても印象的で、同じ図書室に働くものとして、うなずき、感心し、刺激になる講演であった。

V. 「沖縄メディカルライブラリー研究会」の紹介

今回初めて生図研に参加するにあたり、地元のネットワーク「沖縄メディカルライブラリー研究会」（以下、研究会）の発足から現在までの活動を簡単に紹介することとなった。

沖縄県内病院図書室ネットワークの活動自体は古く、19年前の1988年に遡る。当時は情報の入手も難しく、さらに司書の立場も弱く、兼任かひとり部署で相談できる相手がいないなど、担当者の共有する悩みがあった。そのため、定期的に交流を持ち、相談し合い、協力し合う（相互貸借）ようになった。交流会も勉強会という形になり活発化していった。しだいに参加者も増え、沖縄県に病院図書室研究会を立ち上げようという声が上がった。そして遂に1997年9月に「沖縄メディカルライブラリー研究会」が発足し、今日に至っている。

現在の研究会は、会員機関数が24機関で、年1回の総会と年2回の研修会を行い、懇親会やその他の研修会への呼びかけなど、事務局会議で計画し、行っている。

当研究会は、病院図書室だけで構成されているわけではなく、看護大学附属図書館や専門学校図書室、クリニックなど多種の医療系図書室が集まり、研修会においてもそれぞれが違う角度から業務を見て意見し合える、貴重な学びの場となっている。

今後の目標として、会員全体のレベルアップ、定期刊行物の発行などが挙げられるが焦らず着実にクリアしていきたい。

また、2007年は研究会が満10才を迎える年となり、10月には10周年の記念事業を計画している。現在研究会全体で力を合わせ、取り組んでいるところである。

これからも、現在の持ち味を生かしつつ、研究会を継続させていきたい。

VI. おわりに

今回の生図研での目的だった大学図書館と小規模図書館の交流は、一定の成果があったのではないだろうか。

大学図書館と小規模図書館の共通点や相違点が、少しでも多く理解し合う事によって、スムーズな協力活動が行える。そしてそれは、小規模図書館から大学図書館への一方的な片思いになるのではなく(依存するのではなく)小規模図書館ならではの役割をみつけ果たして行ってこそ、真の協力活動になると考える。

病院図書室という立場から参加した者として「狭い環境に甘んじる事無く、自らその環境を押し広げる努力をしていこう」と強く思わせる会だった。

また、今回は沖縄県での開催にも関わらず、何の手伝いもできず参加するのみであった。心苦しさは残るもの

の生図研そのものは成功し、懇親会もおおいに盛り上がり胸をなでおろした。

沖縄から他都道府県で行われる各種研究会への参加は、時間と費用の問題があり難しいところであるが、今回はわれわれ研究会の会員も多く出席することができ、貴重な時間を過ごさせていただいた。このような機会を設けていただいたことに、紙面をお借りしてお礼を申し上げたいと思う。

余談になるが、雨の多い2月にしては1日を除き晴天に恵まれ安心した。またお会いする機会があれば、沖縄の印象をお聞かせいただきたい。